SAMPLE



仕事人生を
旅するインタビュー

仙崎 久志

SENZAKI HISASHI



制作・著作　アン・ナンテ　（Un-Nante ／代表 三谷 恵里佳）

※本冊子は、「仕事人生を旅するインタビュー」において、ご本人のために制作した特別な一冊です。
ご自身の振り返りや、ご家族など大切な方との共有にお役立てください。なお、インターネット上での公開や商用利用はご遠慮いただいております。



地道な仕事が“当たり前”を支える
品質に向き合い続けた35年と、その先の道

PROFILE

仙崎 久志
SENZAKI HISASHI

1969年長野県松本市生まれ。千葉県船橋市在住。
S大学工学部応用化学科卒業後、1991年にSJ化成株式会社に入社。千葉工場の製造課で9年間の現場経験を積み、品質保証部へ。同部にて係長、課長を歴任。2017年より本社技術管理部長として、3つの工場の品質管理体制を統括している。趣味は、ウォーキングと地酒の取り寄せ。

「品質保証は、何も起きないのが一番いい仕事なんです」
――仙崎久志さんは、穏やかな語り口でそう話す。

化学メーカーで35年。製造現場からキャリアを始め、品質保証の仕事に向き合い続けてきた。目立つ成果として語られることは少ない。けれど、「当たり前」の裏側には、「品質を守る仕事」の積み重ねがある。

小さな違和感を見過ごさなかった夜。「感覚」ではなく「データ」で語る日々。品質と信頼を守りながら磨かれてきた、仙崎さんの仕事人生をたどった。

（2026年3月10日 都内某所にて）

父の背中を追って製造現場へ
ものづくりは「体で覚えるもの」だった

約束の10分前。仙崎さんはインタビュー会場に到着した。受付前の椅子に膝を揃え、姿勢よく座る。

しばらくしてインタビュアーが声をかけると、すっと立ち上がった。

会員制シェアオフィスを訪れるのは初めてだという。「こんな感じなんですね」と興味深そうに見渡しながら、会議室に入った。椅子に腰を下ろし、手元の資料を整える。

杢調のジャケットに紺色のシャツを合わせた装い。表情には、わずかに緊張が見える。ホットコーヒーを一口飲みながら、仙崎さんは「インタビューを受けるのは初めてなもので」と小さく笑った。

事前のヒアリングシートには、自身のキャリアについて「特に秀でたことはないかもしれません」と書かれていた。記された文章の端々に、謙虚で実直な人柄が表れている。

まずは入社当時のことから伺いたい。インタビュアーがそう伝えると、仙崎さんの表情がふっとほころんだ。

「工場の話ですか。もう35年前ですね」

少し遠くを見るような目で、静かに話し始めた。

1991年の4月、仙崎さんはSJ化成株式会社に入社した。産業用の機能性樹脂やコーティング剤を手がける化学メーカーである。

仙崎さんが就職活動をしていた当時は、いわゆるバブル景気の終盤。就職先として金融や商社が人気だった時代に、メーカーで技術者として働く道を選んだのは、父親の影響が大きい。父は、地元・松本の精密機械部品工場で働く技術者だった。

「幼い頃、よく父の工場に連れて行かれまして。油まみれの手で機械を触っている姿が、子どもながらにかっこよく見えたんです」

その記憶が、「ものづくりに関わる仕事がしたい」という思いにつながっていった。

大学では高分子化学の研究室で、工業用接着剤の耐熱性をテーマに研究に取り組んだ。華やかではないが、産業の現場に直結する分野。仙崎さんの言葉を借りれば「地味だけど、人の暮らしを支える素材をつくる仕事」だ。

入社後、千葉工場の製造課に配属された。いざ現場に立つと、大学で学んだこととの違いに面食らった。知識として学んだ化学反応が、温度や湿度、作業者の手加減ひとつで変わってしまう。真夏には、工場内が40度近くになることもあった。

「想定外の連続で、身をもって実感しましたね。ものづくりは体で覚えるものなんだなと」

先輩の職人たちは、機械の音や原料のにおいで異変を察知する。最初はまったくついていけなかった。毎日ノートに記録をつけ、分からないことはその日のうちに聞く。地道に学び続け、2年ほど経ってようやく、一人前と認めてもらえるようになった。入社3年目には、樹脂の混合工程で温度管理の手順を見直す提案をしたところ、不良率が改善した。

「本当に小さなことです。でも、自分の提案が目に見える形で結果につながったのは嬉しかったですね」

現場で積み重ねた経験は、のちに品質保証の仕事へとつながっていく。

数値だけでは分からない工程の癖、現場で働く人の判断、機械のわずかな変化――その一つひとつを、仙崎さんは目に焼き付け、全身に染み込ませていった。



インタビュー当日の空。薄い雲の向こうに、青空がのぞいていた

※このパンフレットは、サービス内容を紹介するために制作した【サンプル】です。登場する人物・組織・設定はすべて架空のものであり、実在する人物・組織とは関係ありません。

SAMPLE

感覚ではなく データで語れ

千葉工場の製造課では9年を過ごした。その時期を振り返る中で、仙崎さんの口から繰り返し出てきた名前がある。当時、製造課の主任を務めていた8歳ほど年上の先輩Aさんだ。

「Aさんに言われたんです。『データで語れ。感覚では人は動かない』と」

入社して数年が経ち、現場の感覚がようやく身についてきた頃の仙崎さんは、「こうしたほうがいいと思います」と肌感覚で提案することが多かった。Aさんは受け止めつつも、必ず「それで、根拠は？」と問い返してきた。

はじめは戸惑った。頭では分かっていても、他者にどう伝えればいいのか分からなかったからだ。Aさんの問いに十分に答えられない。そんな自分に情けなさを感じ、仙崎さんは「根拠をデータで示す」ことを習慣づけていった。製造条件や検査値を記録し、数値で裏づけを取る。次第に、周囲の反応が変わっていった。

「たとえば工程の改善を提案するにしても、『なんとなく効率が悪い気がする』では通らない。でも、1週間分のデータを並べて『ここにばらつきがある』と示すと、みんな真剣に聞いてくれました」

データは、現場の感覚を否定するものではない。むしろ、感覚を周囲に伝えるための共通言語になる。現場を離れ、管理職になった現在も、仙崎さんの仕事の根底にはつねに「データ」がある。

Aさんは2019年に早期退職し、送別会の幹事を仙崎さんが務めた。その席でAさんから「仙崎が一番成長したな」と声をかけられた。

「ちょっと誇らしかったですね。あの頃は、よく怒られましたけど」――持参した送別会の写真を見つめながら、仙崎さんは懐かしそうに微笑んだ。その表情は、Aさんが今も仙崎さんにとって大きな存在であることを物語っていた。

「わずかなずれ」を 見過ごさない

2000年、仙崎さんは千葉工場の品質保証部へ異動した。製造現場での働きが評価されての人事だったが、内示を受けた当初は「なんとも言えない複雑な心情」だった。

「正直に言うと、嬉しさより名残惜しい気持ちの方が大きかったですね。自分で手を動かしてつくる仕事に愛着がありましたから」

製造現場では、目の前の製品をつくる。一方、品質保証部では、現場でつくられた製品を確認・検査する。出荷された製品が実際に使われるところまで、品質に責任を持つ仕事だった。

品質保証の担当として「最も印象深い出来事」を尋ねると、仙崎さんは「ある製品に生じた“わずかなずれ”」を挙げた。2003年のことだ。定期的な検査の中で、品質データに変化が見つかった。すぐに問題が起きるものではない。見過ごしても不思議ではないほど小さな変化だった。

何もしなくても問題は起きないかもしれない。それでも、見過ごしたら後悔する。そう思い、仙崎さんは原因調査の主担当を自ら買って出た。

関係のありそうな要素を洗い出し、データを一つずつ確認して、過去の記録とも照らし合わせていく。通常業務と並行しながら調査を続け、約1週間後、工程上の小さなばらつきにたどり着いた。

結果的に大きな問題には至らなかった。だからこそ、表立って評価されることもない。けれど、見過ごさなかった判断が、日々の「当たり前」を支えている。



手を動かして「つくる」仕事から「品質を守る」仕事へ
品質の検査では、製造現場での経験から異変に気づくことも多いそう





「現場の中には、大げさだと思った人もいたでしょう。でも品質の仕事は、何かが起きてからでは遅いんです」と、2003年の調査を振り返る仙崎さん

現場の声を聞き、 正しいことを言い続ける

千葉工場の品質保証部にて2005年に係長、2010年に課長に昇進。そして2017年、仙崎さんは本社の技術管理部長に就任した。千葉、名古屋、福岡。3つの工場の品質管理体制を統括する立場である。

着任後ほどなくして、大仕事を任された。全社の品質マネジメントシステムの統合だ。

3つの工場には、それぞれ長年培ってきたやり方がある。品質基準や検査手順にも違いがあった。それらを全社で一貫した基準へと整えるプロジェクトを立ち上げ、仙崎さんが責任者を務めた。

品質基準をそろえること自体に、大きな反対意見はなかった。ただ、各工場にはそれぞれの歴史や事情がある。現場にしてみれば、本社が決めた基準を一方的に押しつけられたと感じかねない。

「理屈が正しい。それだけでは、現場は納得しません」

仙崎さんは何度も現場に足を運び、各工場の担当者と膝を突き合わせた。ときには夜遅くまで現場に残り、交代勤務の担当者とも話をした。

「昼の会議では出てこない本音が、夜の現場では聞けるんです。『意義は分かるけど、この工程では難しい』とか、『前にこういうトラブルがあった』とか」

対話を重ねながら、各工場のやり方の良い部分を新しい基準に取り込んでいった。単に統一するのではなく、現場が納得できる形に整えていく。そこに時間をかけた。

現場の声を聞く。そのうえで、正しいことは正しいと言い続ける。「管理職の仕事は、どちらが欠けてもうまくいかない」と仙崎さんは力強く話す。

1年がかりでプロジェクトは完了し、3つの工場が同じ品質基準のもとで動き始めた。仙崎さんの役割は、一つの工場の品質を見ることから、会社全体を支える仕組みづくりへと広がっていた。



35年、飽きたことは一度もない

新卒で入社してから35年、同じ会社で働き続ける間に、「この仕事を辞めたい」と思うことはあったか。その問いに、仙崎さんは迷わず首を横に振った。

「しんどいことがあっても、現場に行くとまた頑張ろうと思えました。気持ちの浮き沈みはありましたが、飽きたことは一度もありません。私は結局、ものづくりと、それを支える仕事が好きなんですよ」

そんな話をしながら、仙崎さんがふっと笑った。聞くと、かつて息子と交わした会話を思い出したという。

「当時中学生だった息子から、『品質保証って地味だよね』と言われたことがあって。悔しいですが、その場では反論できませんでした」

仙崎さんは軽く苦笑いして、こう続けた。

「たしかに、光の当たりにくい仕事です。でも私は、この仕事に誇りを持っています」

景気の波にさらされた時期もあった。東日本大震災ではサプライチェーンが寸断され、代替原料での品質確保に奔走した。コロナ禍では人手不足による検査体制の見直しに追われた。

外部環境が大きく揺れても、仙崎さんは妥協せず、品質と信頼を守り続けてきた。

経験を言葉にして、未来につなぐ

技術管理部長になって9年。最近、力を入れているのは後任の育成だ。次の部長候補として見込んでいる45歳の部下がいる。仙崎さんは少しずつ、自分の判断プロセスを言語化して伝えている。

「自分がどう判断しているか、あまり意識していなかったんです。改めて言葉にするのは、なかなか難しくて」

品質の仕事には、マニュアル化できる部分と、できない部分がある。データを見る。現場を見る。関係者の話を聞く。そのうえで、どこまで確認するのか、どこで立ち止まるのかを判断する。仙崎さんが長年かけて身につけてきたものは、簡単に言葉にできるものではない。

「教えながら『自分はこんなふうに考えていたのか』と気づくことがあります。まだまだ学ぶことは多いですね」

35年かけて体に染み込ませてきたものを、改めて言葉にする。それはノウハウを次世代につなぐと同時に、自分自身の経験を棚卸しする時間にもなっている。

仙崎さんの仕事人生を一通りたどり終えると、休憩を含めてインタビュー開始から3時間が過ぎていた。結びの前に、インタビュアーが「家族への思い」に話を向けた。すると、仙崎さんは少し照れくさそうに目を伏せながら答えた。

「若い頃は仕事ばかりで、家のことは妻に頼りきりでした。感謝してもしきれません」

数年前に子どもたちが独立し、家庭では妻の裕子さんと二人で過ごす時間が増えた。週末に一緒に買い物や映画鑑賞へ出かけたり、ゆっくり晩酌したり。来月には、裕子さんがずっと行きたがっていた長崎のハウステンボスに旅行するという。

家族の話をする仙崎さんの声は、一段とやわらかかった。

SAMPLE

役職定年の先へ“品質を守る”力を活かしていく

インタビューの結びに、役職定年を迎えるまでの3年間について尋ねると、仙崎さんは背筋を伸ばしながら口を開いた。

「後任の部長を育て、バトンを渡す。それが最後の大仕事ですね。役職を離れた後にどうするかは、まだ決めていません」

現場を知っている。
データで語れる。
小さな変化を見過ごさない。
相手の立場に寄り添いながら、正しいと思うことを言い続ける。
これらは、「技術管理部長」の肩書きにひもづいた能力ではない。一つひとつ、35年かけて仙崎さん自身に刻み込まれてきたものだ。

「品質保証は、組織や業種によって方法は違いますが、考え方の根っこは共通しています。……もしかしたら、会社の外でも何かできることがあるかもしれませんね。今日、自分の経験を言葉にしてみて、そう思えました」

役職定年まであと3年、
定年退職まであと8年。
いずれも仕事人生の節目である。
けれど、終着点ではない。

これまでの経験を活かして、これからどう歩むか。まだ具体的な形は見えていない。だが、立場や環境が変わっても、「品質を守る」力は仙崎さんの内で息づいていく。

インタビューを終えて席を立つとき、仙崎さんは「自分の仕事について、こんなにじっくり話したのは初めてだな」とつぶやいた。

「すごく濃密な時間でした」――そう言いながら微笑む表情には、静かな充実感が浮かんでいた。



あなたにとって「仕事」とは？

